

学習会 「農業を株式会社化するという無理」

日時： 未定、もち麦などの収穫が終わったころ(12 月中ごろ)にいたします。決まり次第連絡しますので、興味のある方は青野(hi645z@bma.biglobe.ne.jp)まで連絡願います。

場所： 香川県三豊市高瀬町麻地区南山 河野博氏アトリエ

-----学習会の資料-----

未来が今より幸せであるという共通意識がなくては、意識変革は難しい!!

—「社会形態は、モラルに先行する」 たくさんのおしゃべりから多様な試行を!—

青野 豊一

テキスト 家の光協会刊 『「農業を株式会社化するという無理 これからの農業論』』

★この本を使つての学習会で思考していく前に、参考資料として見田宗介著作集「現代社会の理論」(岩波書店)からいくつかの文章を掲載したい。ここに書かれていることを踏まえて考えていきたい。

* 下線は、青野が強調のためにしている。

P.171 「2006 年にある種社会的な話題となった映画「ALWAYS-三丁目の夕日」では、1958 年という、高度経済成長始動期の東京を舞台としている。この映画のほとんどキャッチコピーのように流布した標語は、「人々が未来を信じていた時代」というものであった。「未来を信じる」ということが、過去形で語られている。1958 年と2006 年という50 年くらいの間に、日本人の「心あり方」に、見えにくいけれど巨大な転換があった。」
「1950、60、70 年代くらいまでの青年たちにとって、現代よりもずっと素晴らしい未来、よい未来、豊かな未来が必ず来るということは、ほとんど当然の基底感覚であった。それがどのように素晴らしい未来、であるかについて、さまざまなイデオロギーやビジョンが対立し、闘われていた。21 世紀の現在、このような「未来」を信じている青年は、ほとんどいない。人々の生きる世界の感覚の基底の部分に、沈黙の転換はあった。」

この意識転換は、NHK 放送文化研究所が 5 年ごとに行っている「日本人の意識調査」にはっきりと現れている。この二つの時代の明瞭な変容を、少なくとも次の二つの領域で見ることができる。

P.180「第一の顕著な変化は、〈近代的な家父長制家族の解体〉と呼ぶべき一群の変容である。…ナショナリズム、天皇制、職場や地域の関係の意識などよりも以上に、「家族」と関連するジェンダー関係の理想と欲求とモラルの領域に集中してきわだっている。」

これまでの男女の、夫と妻のはっきりとした役割分担は、経済成長の推進力となっていた。しかし現在は、専業主婦と企業戦士による家族像というものではなくなってきた。そして、性規範、性的関係は結婚や婚約を前提としてのみ許されるというのは、すっかり消え失せてしまった。従来^の家族観は、大きく揺らいでいる。生殖とセックスは大きくかけ離れた。

* これについては、縮小社会研究会の HP の私の「家族の復権 多様な形態の家族」を参照

「…第二の大きな兆候は、〈近代合理主義的な世界像のゆらぎ〉というべき変容である。」P.180

あの世や奇跡、そしてお守りやお札の効用を、それとはなしにそれなりに信じようとする傾向が強くなってきている。科学の発展に期待することが、薄れている。そのため、神社や寺にお参りすることへの抵抗感が薄れている。精神の自律・自立を求める意識(人生の羅針盤*)が減退してしまい、その時々々の流行に敏感に反応するレーダー機能*ばかりを高めている。このような意識状況のため、怪しいカルト宗教が流布しだしている。

*レーダー機能と羅針盤、これについてはリースマンの「孤独な群衆」を参照

さて、人々の生きる世界に対する感覚の「沈黙の転換」がどうして起こったのであろうか。私なりに考えられることは、二つある。一つは、若者たちが「情報化/消費資本主義」の中に漂っているためであろう。これはまさしく「情報漬けの便利さ」ばかり求めているためである。私たちの青年期は、今と比べて情報は限られていた。情報が多すぎない方が、未来は明るく見えるのだ。実際は大苦労の連続であったが、…。今の若者は詳しく知りもしないのに、いろんな情報は次々と飛び込んでくる。人生の苦労はしてみないと分からないのに、初めから意気消沈している。子供のうちから未来に絶望しているとも言えよう。女子高生が自分の事をオバサンと言う。便利さを求めすぎて、他の人たちと比較ばかりして不幸になっているようだ。もっと便利な、もっと素敵なモノがどこかにありはしないかと探し回り、心が落ち着かない。情報と、うすっぺらな便利さに振り回されているのではなかろうか。

もう一つは、私たちの時代は、今貧しい生活をしていても、いやそれ故に、未来には豊かな生活をしようと頑張ろうとする意思があった。未来は漠然とはしていたが、良いことがありそうだと期待した。社会的流動性が高かった。貧富の格差が露骨には表に出なかった。田舎では農地解放によって、戦後の民主化の改革で、貧富と家柄等による差異が小さくなっていった。実際に社会が大きく変化していった。自分の周りの環境が次々と年々変わっていった。これに対して、今の青年たちにとって、自分の周囲の生活環境の変化が私たちのころに比べて少ない。この変化しているという体験がない。そして、物質的に豊かな時代に生きていて、家の中からあふれ出ようとするたくさんの品々、小さいころからのたくさんの子供用の遊び道具に囲まれてきた。漠然とした未来への期待などなくても、未来社会が素晴らしく良くなるという期待感なくても生きていける。火傷するような熱い思いなど抱かないのだ。現状を幸福であると見なして保守的になっていることが、うかがわれる。変化をあまり求めない、という意識になっている。

* スマホを片手に持ち、歩きながらも見ている若者、食事をしながらもスマホを操作している人たちがいる。私には、理解不可能である。食事中に、スマホをいじって何が楽しいのか。家族と話をしながら食べたら、料理がおいしいと思うが、…。これは、私の長男の事でもある。

* このような若者の意識については、大澤真幸「未来との連帯は可能である。しかし、どのような意味で？」(FUKUOKA U ブックレット弦書房)を参照。このような未来への希望をもてない意識状況の人たちが、差別的であり右翼的な社会言動を作り出している。

つまりは、現代社会の若者たちは、未来への希望が持てないため、生活が苦しくな

ったり、精神的に生きづらさを感じると、自分とは異なると考えている人たちを排除したり差別しやすい意識状況にいる人たちが結構いるということだ。これは、部落差別や在日の人たちやアジアの人たちへの差別心として現れてきている。

「二十世紀の後半は・・・「近代」という加速する高度成長期の最後の局面であった。この最終の局面の拍車の実質を支えていたのは〈情報化/消費資本主義〉のメカニズムである。」P.184

・古典時代の資本主義 消費市場の需要に対応する生産

例として、フォードの車、規格化された大量生産方式、低価格の堅牢な大衆車

〈マルクスの資本主義理解は、この次元〉

・車は、デザインと広告宣伝とクレジットで売れる

これは、GM の生産と販売の戦略である。情報化の様々な方法で車をファッション化した商品とした。定期的にデザインや性能を変更して、それを宣伝して車の借り換えを促し、需要を喚起した。これは、情報による消費の創出である。これにより、それまでの定期的な過剰生産恐慌を克服した。それと、IMF 管理通貨体制(ドル基軸)で世界経済の安定を図った。→1971 年金とドルとの交換停止、IMF 体制崩壊へ

しかし、2008 年のリーマンショック(金融の崩壊)によって GM は倒産した。これは、「証券化に証券化を重ね、国際化に国際化を重ね、・・・強固な現実であるかのごとき相貌を獲得した巨大な虚構のシステム」P.186 が一気に崩壊した。これは、〈情報化/消費資本主義〉の限界を露呈したものである。

* 東洋経済オンラインより

リーマンショックが世界的に深刻な問題を引き起こしたのは、二つあります。一つは、セキュライゼーションです。債権を証券化することで転売して、その利益をまたサブプライムローンに投資して、それをまたセキュライゼーションで際限なく自己循環で膨張していきます。これをさらに信用リスクに応じたクラスターに分割して、リスク許容度に応じて販売するという金融工学的手法も活用されていきます。安心度は高まりますが、証券投資に絶対はありません。3A でも経営破綻する場合はあり得ます。だから格付けなのですが、この格付けは過去の実績を積み上げてのシミュレーションですから、計算外の事態では破綻します。それがロシアの国債でした。それによって、緻密な計算を高度に行った金融工学の結晶とも言えるヘッジファンドがいつも簡単に経営破綻したわけです。もう一つは、複雑すぎて潰せない、ということです。金融市場の専門家ですら、サブプライムローンを原資としたセキュライゼーションの複雑さでリスクがどの程度か理解できなかったのです。あまりに複雑で潰せない、ということになります。「次のリーマンショック」はいつ来るのか、という問いがあります。答えは、いつか来るだろうがその時期は誰にも分からないということです。それがバブル経済です。その景気過熱がバブル経済だと分かれば、すぐ崩壊しますのでだれも投資をしません。つまり、バブル経済と認識されたらバブル経済は崩壊するのです。その時の景気過熱がバブル経済だと誰も分からないから、バブル経済は成立するのです。崩壊して初めて、あれはバブル経済だったと説明できるのです。

事前にバブル経済を予測できないのでしょうか。それはバブル経済の定義によります。バブル経済は、どのような経済指標でも説明できない価格の高騰という定義があります。日経平均が四万円水準に近づいたとき、それでも低いとするQレシオが登場します。当時、高株価を説明する理論として持て囃されましたが、暴落しては誰も見

向きもされません。それを当時提唱したエコノミスト達も言い出したことを忘れていて、何事もなかったように別の理屈で今度は低価格を説明しています。

まあ、投資理論とはそんなものです。まとめです。バブル経済とは崩壊して初めてバブル経済と分かるのですから、事前にそれを予測することはできません。予見不可能だからバブル経済は成立するのです。金融市場は予見できる、コントロール出来る、とは勘違いです。正確に言えば、金融市場とはコントロール出来るときはコントロール出来るのであり、できないときにはできないのです。市場が総体的に安定しているときには日銀の金融政策も効きますが、荒れ始めればどうにもなりません。それを実証したのがリーマンショックなのです。金融市場を日銀が、FRB がコントロール出来たらリーマンショックは起きなかったのです。

*これこそが、『崩壊 5 段階説』(ドミートリー・オルロフ 大谷正幸訳 新評論)による①金融の崩壊なのだ。これは、いつ起きても、不思議ではない。何かのきっかけで始まる。それを予測することは、難しい。そして、②の商業の崩壊は、石油の枯渇という問題が直結している。遠くない時期に、これは確実に起こる。

「2008 年のグローバル・システムの危機を 1929 年恐慌の反復とみて、「100 年に一度の危機」を説くのは、20 世紀型の成長経済がやがて再開して永続するはずであるという思考の慣性を基礎としている。」P.187

「思考の慣性」としての昔の経済成長という夢から、多くの人たちが抜け出ることができない現状がある。

「近代」という高度成長期の人間にとって自然は、「無限」の環境として現象し、開発と発展のための「征服」の対象であった。「近代」の高度成長の成功の後の局面の人間にとって自然は、「有限」の環境容量として立ち現れ、安定した生存の持続のための「共生」の対象である。…「近代」に至る文明の始動期に、この新しい社会のシステムは、人々の生と思考を、共同体という閉域から解き放ち、世界の「無限性」という真実の前に立たせた。」P.187 *これは、資本主義の文明化作用である。

が、今や、この世界像が、崩れていることに気付かなくてはならないが、それがなかなか難しい、意識変更できない人が多い。

「近代」の思考の慣性のうちにある人間にとってこの「歴史の終息」は、否定的なもの、魅力に乏しい未来のように感覚される。」P.189

「1970 年代までの人々の歴史意識は、というよりも「自明」のように前提されていた歴史感覚は、歴史というものが「加速度的」に進歩し発展するという感覚である。…どこかで方向を転換しなければ、このまま進展する限り破滅に至るだけである。」P.176

だが、再度繰り返すが、この転換が簡単になされるものではないことを、認識しなくてはならない。見田氏は、次のようにも述べている。

「おそらく大半の人々にとっては、少なくとも相対的に、またさまざまな条件付きでは、この情報化/消費化社会は、世界で最も魅力的な世界である。」P.109

「…魅力については誰の目にも見え、見えやすすぎるという仕掛けになっているから、…。」P.109

冷戦の終結は、「軍事力の優位による勝利ではなかった。…軍事力に関する限り、二つの陣営は、互いに他を圧倒して勝利することができないという膠着の状態にあった。この膠着を突き崩したのは「自由世界」の情報と消費の水準と魅力性であり。一層根本的なところでは、人間の自由を少なくとも理念として肯定しているシステムの魅力性である。」P.110

技術開発でもソ連型社会主義は負けたのだ。資本主義経済で利益を得るには、技術革新を図らなくてはならない。それは、社会的に強要されている。技術の革新なくしては他との競争に負け、いくら労働者を働かせてもモノは売れないことになる。剰余価値は発生しない。この社会的圧力による技術革新に対して、国家官僚支配のソ連は大きな後れをとった。

「ビートルズもディランもサンタナも、あの輝きと歓喜に満ちた 70 年代コミュン*の
日々も、この現代の情報消費社会の水準に支えられていた。情報と消費のシステム
自体へのあらゆる批判と反発を許容しさえする「豊かな社会」と、その自由とに支えら
れていた。」 P.110 *60年代後半からの学生運動の高揚、新左翼運動等の社会変革への熱き思い

「現代の消費社会の成功は、情報化を媒介として欲望を自由に創出することを通して、市場システムが自由な展開を持続するための、「需要の無限空間」ともいうべきものを見出してということにある。それは欲望の文化的恣意ともいうべきものの、「必要の大地」からの離脱を前提していた。」 P.124

「<人間の生きることの歓び>というものは、「必要」にさえも先立つものでありながら、どのような「必要」の限度も越えて、限りなく自由な形態をとることのできるものである。」 P.125

このことは、今の私たちの家には物があふれていることから理解できる。絶対に必要なものではないのに、便利だから、かっこいいから等で次々と買い求めてきた現代社会の人々の行動そのものである。現代は「必要」の程度を越えて欲望が作り出されて、そして宣伝されて、この消費文化に溺れている人がたくさんいる。この現象を、厳しく批判する人がいるが、この必要の程度は、社会の在り方によって異なって来ることを忘れてはならない。生きて行くには、食糧・住居等々、しかし、現代はこれに加えて上下水道・医療品・普通教育の制度・電話・テレビ等も必要なものとなっている。これが無くては、社会生活に参加できないこととなる。

必要とはただ生きて行くだけではなくして、快適に・健康に・安心して・楽しく・歓びを感じ取って生きて行くためのものであろう。生きて行くには歓びが、この期待が持ち得るという状態、地域社会でなくてはならない。だから、**歓喜と欲望は、必要よりは根源的であるとも言い得る。これを感じ取ることができないのであれば、生きていくことの意味を失うことになりかねない。**だから、必要という下限が満たされていて、情報はこの上の**歓喜と欲望へと開かれていないといけない。**

となると、この歓喜と欲望の内容が問題となる。世界には、まだまだ食べ物が無くて飢えて死んでいる人たちがたくさんいる実態がある。だが、先進国の一般的な人たちを相手にしていると、もう必要な量よりも、おいしさ・美しさ、そして希少性等が、他との差異が、その価値を高めている。例えば、カボチャ入りのスイーツを食べたとして、消費者はカボチャの栄養を求めていたのではない。他の材料との混合を、味・色合い・舌触り・形(デザイン)を、そして素敵なネーミング等のイメージを食べているのだ。こうなると、この商品は、資源収奪型とも他の社会からの収奪型とも言い難い要素が多くなる。

しかし、<情報化/消費化社会>は、その資源と環境的な限界を科学技術の発展で遅らすことはできても、この永久的な可能性(限りない効率化)はない。だが、資源・環境

は有限であるが、情報の在り方の進展・高度化ではなしうるかもしれない。情報による幸福の無限性をもたらす可能性は、ありうるとも言えるかもしれない、・・・?情報としては、次の三つが考えられる。

①知識としての情報—人間の主観性の打破、しかし、これも限界がある。いくらでも入らない。知識を得ることを拒否したり、入って来る情報を編集することができなくなる現実がある。

②制度設計としての情報—これはコストの削減につながる。そして、人員の削減(失業)へとつながっていくことになる。*①と②は、手段としての効用

③歓びとしての情報—社会経済が成長した後も、さらに成長することが健康的であるのは、非物質的な様相を変えていくことである。この在り方を変更していくことが大切な事となる。歓びとしての情報の発展は可能性としてありうるのだから、この方向へと、欲望と感受性を転回していくことしかない。考えられる一つは、文化活動の意味を高めていくことであろうと思われる。

しかし、資源と環境的な限界と他の社会からの収奪という問題を解決するには、人々の意識の変更が必要なのだが、そのためには、未来が今より幸せになるであろうという意識を分け持つことが無くては難しい。このことを忘れてはならない。

「目に見えないものは、空間的に遠い地域の人々に転嫁されているゆえに目に見えないもの、時間的に幾年も幾世代もちの帰結であるゆえに目に見えないものであるだけでなく、モノとして存在しないゆえに目に見えないものであることがある。・・・測定し交換し換算しえないものへの視力、つまりかけがえのないものについての視力をふくまねばならないだろう。」P.148

私たちは、未来への希望だけではなくして、未来の人や過去の人たち、そして見たこともない他の地の人たちへの配慮という難しい困難なことを克服しないと行けない。このためには、情報発信の在り方、そしてその質の向上を図らなくてはならない。そして、個々人が情報選択と処理能力の、思考力の向上を図らなくてはならない。テレビで娯楽番組ばかりを見ていては、このようなことはなしえないであろう。また、生活していく上での目先の欲に心がとらわれることが少なくなるような社会福祉施策の充実が必要となるであろう。このような社会システムが整備されないと、非物質的な歓びが未来において良くなるという感覚になれない現実がある。文化的なことに目が向かない人たちが多いのだから。

さらにそのためには、また意識変革もなされなくてはならない。何らかの宗教的要素が必要となるであろうことが予想される。

「『消費の社会』という思想とシステムに正しさの根拠があるのは、それが生産の自己目的化という狂気から人を自由にする限りにおいて」P.153 である。

「『情報化社会』というシステムと思想に正しさの根拠があるのは、それが我々をマテリアル(物質的)な消費に依存する価値と幸福のイメージから自由にしてくれる限りにおいて」P.153 である。

現状は①と②の手段としての効用を求める段階にとどまっている。そして、この情報の中で、溺れている。でも、とんでもない悲惨な生活を社会全体で経験すると、

人々の意識は変化するであろう。しかし、こうならないように努めなくてはならない。この場合、ともするとファシズムという私たちがもう歴史的に経験している独裁的専制社会になってしまいがちであることを忘れてはならない。私たちは、困難な課題の克服をしなくてはならない歴史的段階にいるようだ。現状以上にひどくならない状態の時に、変革へ向けての第一歩をあゆみださなくてはならないのだが、…。これには、人々の知的文化的教養度の向上が欠かせない。未来社会への展望が見いだせない時、トランプや安倍のような政治家が登場してくる。

「質実であっても、健康な生の条件を万人に保障する科学技術の展開と、なによりもく存在すること」の奇跡と輝きとを感受する力の解放という、幾層もの困難な現実的な課題の克服を我々に要請(P.189)されている時代になっている。

このように社会システムを変更して、乗り越えるには、…?…。頭のなかだけで作られる別の理想的なシステムへの幻想に酔わない人こそが、現代社会の矛盾と欠陥に正面から取り組める。本当に自由な社会を実現するためには、その条件と課題を明確化しなくてはならない。

「③歓びとしての情報」の発展の方向性として、見田氏は、この本ではバタイユのことを述べている。彼は、人間の原的な奢侈(しゃし)性、効用に改修されない燃焼しつくす消尽する存在としての力が、宗教的な供儀と信仰、エロチシズムの歴史、原始の洞窟から現代の芸術に至るまで流れ続けているとしているが、…。ここに互酬制と宗教性が凝縮されている。

* 私にとって、バタイユは文学的過ぎて十分理解できない。そこで、補足として「私たちの世界は、物質的に存在していないものによって構成されている」を掲載した。

第4章 平川克美「贈与のモラルは再び根付くか」P.159-の読解を通して

* この本の第一章からではなく第四章から始めることに大きな意味はない。読書会を始めようとした人たちがこの平川氏の経歴について知らなかったためである。そこで、まず詳しく知らない人の述べていることを読解しようということになった。平川克美氏の経歴については、当日配布の別紙参照。

①グローバリズムについて

「農業を含めた第一次産業がこれからますます重要になっていくことは確実…。」

グローバリズムは、領域国家を認めていない。このような人為的な共同体(国民国家)が、物流や売買に干渉することは市場の原理に反するというのがこの主張である。グローバリズムの物差しは、市場の原理、つまりは人的関係ではなくして、「無縁」「匿名」の作り出す価値観によって作り出された貨幣による物差しのみである。だから、このことで生まれてくるのは、文明であって文化ではない。

ようするに、お金がすべての世界なのだ。お金儲けを効率的にすることを目的としている。国家行政による再分配のための税金をできるだけ少なく、ビジネスへの規制も取っ払い、儲けた金銭はすべて自分の物とする企業最優先の、勝ったものが総取りするシステムである。それを、自己責任で競争させるシステムである。

平川氏の述べているグローバリズムの問題を少し具体的に即して述べたい。日本社

会が露骨に変化してきたことが表面化してきたのは、小泉総理の時からであろう。「郵政民営化」は、国民生活に直接関係することではないのに、これこそが最も大切な事であるかのごとき騒動を起こした。自民党内が分裂した。マスコミは、これを面白おかしく報道した。それも連日に、お祭り騒ぎとして……。野党のことなどちっとも報道しなかった。その結果、自民党の大勝という結果になった。この時ほど、日本国民の思考力のなさを痛感したことはない。これらの構造改革は、時の権力がそもそもアメリカの対日要求に従ったことなのだ。これは、まさしく内政干渉である。当時日本の製造業の力は強く、そのためにアメリカはますます不況となっていた。アメリカ国内は、物づくりから→流通業→金融業へと産業界が大きく変化していた。この実態にあわせて、日本国内の市場をアメリカ資本に開放することを露骨に求めている。農産物の自由化、大規模店舗法の緩和等々である。しかし、このことに、多くの国民は気付かない。

これらの政策が、じわれじわりと日本国内の諸制度、諸システム、そして諸個人を崩壊させてきた。社会が人々を包み込み保護してきたそれまでの諸制度が一つ一つ壊されてきた。例えば分かり易いのは、公営企業が次々と民営化されたことである。利益を求めることを第一義とする民間企業にすることであった。それは、「お金がすべての世界なのだ。お金儲けを効率的にすることを目的としている。国家行政による再分配のための税金をできるだけ少なく、ビジネスへの規制も取っ払い、儲けた金銭はすべて自分の物とする企業最優先の、勝ったものが総取りするシステムである。それを、自己責任で競争させるシステム」である。

経済が良い時はこの問題が見えてこないが、これが不況や低成長となると、個々人の生活苦が、人間関係の変容・崩壊がはっきりしだした。その苦勞は、すべてが自己責任と宣伝された。これらの政策のため、それまで機能していた行政に頼らなくてもどうにかなっていた相互扶助機能が激しく揺さぶられていった。街の個人商店は、次々と閉じられていった。それまで家族や職場、そして地域での人間関係を通して必要な物・事を手に入れてきたそのシステムが機能しなくなった。それに代わって、インターネットやコンビニ、そして宅配で必要物を調達するようになった。近所や親戚など頼りにならない事態となってきた。都会は無縁社会化し、田舎はそれまでの相互扶助がなくなり慣習としての縛りだけが残った。つまりは、田舎の毒は濃縮されたのだ。

* 鹿児島県の「やねだん」の地域再生は、自治会独自財源をもつことで、地域の相互扶助機能がよみがえったという実践である。そのため、毒の要素が薄まった。

これらの現象は、グローバリズムの現実そのものである。アメリカの対日要求を、大資本の代表である自民党は法律化してきたのだが、この一連の政策に対して、悲しいかな国民の多くはその意味を分かっていない。政府とマスコミの言うがままである。安倍たちはこのような対米従属を一層進めながら、口では右翼的な戦前回帰的なことを、日本の再武装を進めようとしている。しかしこれは、アジア諸国に敵対していくことである。そして、孤立化への道であろう。アメリカが繁栄していた時であれば、この政策も、それなりに意味があった。しかし、アメリカという帝国は、一步一步衰退へと向かっている。

* このような状況のため、資本主義経済を激しく否定する人たちが出て来る。市場経済を嫌悪する声こそかきこいで起きている。しかし、単純否定することは間違っている。また、市場経済と資本主義経済を混同してはいけない

い。市場経済は、大切な役割を果たしていることを忘れてはならない。さらに、それまでの封建的な身分秩序に基づく社会を解体した資本主義の文明化作用は、認めなくてはならない。そしてまた、見田宗介氏の述べているように、今の「情報化/消費化社会」はこれまでの歴史の中でそれなりの優位的であり魅力があり、社会の未来に対して開かれているある原理的ないくつかの可能性を見出すことができるかもしれない。ただし、その在り方を変更していくことで、…。

- * 資本主義経済成立の歴史的条件については、マルクスの『資本論』第一巻の最終章「根源的蓄積過程」が参考となる。しかし、ここに書かれていないことも、指摘しなくてはならない。何故イギリスで産業資本主義が起こったのか。これには、当時のイギリスにおける王権の弱さが関係している。この地では「収奪・再分配」の機能が弱く、「市場における貨幣による商品交換」が発展していくことに妨げとならなかったのだ。このことについて、マルクスは注目していない。彼は 19 世紀の社会発展の中でいたために、このことが見えなかった。

②国内市場 総需要の停滞から減退へ

- ・人口の減退へ その他の統計数字は、その時々都合よく分母が改変されていて信用できない。
- ・家族の形態の変容 * 縮小社会研究会の HP に掲載されている「家族の復権?多様な形態の家族!!」参照
- ・人口減は、特に、結婚年齢の高齢化(晩婚化)が大きな理由である。

これらは、戦争・飢餓によるものではない。食べるのに、日々の生活がある程度安定してきたからこそ、女性の自立が可能となり、家族形態が大きく変化してきているのだ。伝統的家族から、核家族へ、少子化、晩婚化、機能不全家族へと、そして一人ひとりバラバラとなった単身家族へ、…。また、未婚者や離婚者の増加となっている。こうなると、このような人たちが集まって一つの集団となって暮らす新しい家族というのが生まれて来る可能性が大きい。これからは、さまざまな形態の家族が主流になるかもしれない。* 映画「万引き家族」を見ましょう。

- * 結婚に熱心でない女たち、女に興味を示さない男たちのことが、話題になっている。自立を求めている女に対してどのように関わったらよいか分からない男たちが増加している。このような事態に、親たちの不安といらだちは激しい。でも、いらだっても、どうにもならない。これに対して、昔は男女は必ず結婚していたといってもよい実態であった。女は特定の男にくっついていないと生きていけない社会であった。このことについては、『文明としての江戸システム』鬼頭宏 講談社学術文庫を参照

「家族形態が壊れることによって、予想もしなかった人口減少が起きる。人口が減少すると消費が減って、市場がどんどん縮小していく。」

GDP(国内総生産)の大多数は国内市場であり、輸出関連比率は少しであるから、人口減による国内市場が狭くなってきているのは当然である。もう社会経済の成長がなくなってきているので、定常化社会の在り方を社会デザインしなくてはならない時代である。

「経済がもうこれ以上成長しなくなる時が来るというのは、自然過程であり、悪いことだとは言えないのです。社会が発展段階を終えて、成長する必要がなくなったことを示しているだけです。」

この時に役立つのが、第一次産業である。毎年ある程度確定できる量を、長期にわたり収穫していくのが、この産業の特徴であろう。* 見田宗介氏の言う「必要」の次元として

確かにそうであろう。農業では人の二倍働いても、収穫量は二倍にはならない。肥料をたくさん投入しても、そうはならない。多くの場合、天候次第である。天候がその

作物に適していれば、そんなに働かなくてもよい結果となる。しかし、この適する気候とはならないのが、温帯モンスーン気候である。特に、最近は、荒ぶる天候である。また、ある一つの作物に適する気候は、他の作物にとって最適とは言えない。だから、苦勞することになる。

第二次産業は、株式会社という形態をとることにより、大きく発展した。しかし、経済成長ということがなくなり定常化社会となれば、株式投資の意味がなくなる。だからこそ、資本家たちは、必死になって差異・格差を作り出そうとして政治を動かしている。これこそが、今のグローバリズムの掛け声である。あるいは、戦争経済へと経済界の期待が向かっているようだ。

「アメリカが軍事経済から抜けられないのは、戦争がビジネスの側から見ると儲け口そのものだからです。」

* 戦争については、「戦争を起こす人たち」「戦争で利益を得る人たち」「戦争で犠牲になる人たち」と分けて整理すると、戦争経済への異議申し立てがしやすい。私たちは、今後の社会の在り方を思考しなくてはならない。しかし、それは、グローバリズムからナショナリズムへの回帰ではないであろう。

③家業としての農業の崩壊

これまでの長子相続という農業経営の形態が壊れている。長男であっても、今のような農業経営の状態では、後継ぎになっても現金収入は少ないし、厳しい労働だし、・・・都会に出て行ってしまふ。これは、我が家も同じである。私は公立学校の教師をしながら少し農業を手伝っていた。そして第二の人生として農業を選択した。しかし、息子には、同じことをさせたくなかった。田舎の毒に染まった生活をさせたくなかった。いつも背中に見えない黒い紐のついている生活をさせたくなかった。長男は、大学を出て大手の生命保険会社に就職した。そのため、我が家の家守りと墓守りについての話をし始めると、いやな顔をする。しかし、この田舎の我が家の事に対して無関心であっては困るのだ。それなりに苦悩してもらわないと困る。このことは、嫁にも、少しずつ話している。都会で核家族で生活している者にとって、このような田舎のことについて考えるのは、わずらわしいことであろう。されど、最低限には、家守りと墓守りはしてもらわないと困る。

従妹の養鶏業を営んでいる処は、何人かの従業員を抱えつつ、息子二人と一緒に働いている。家業としての仕事に従事している。このような家族経営が、経営的には、儲けは良いようだ。彼は、自民党の石破の講演会に参加して、中国からの侵略にいかに対処するかを語っている。憲法改正を支持している。日本は地下資源がないと私が言っても、「ある大手の会社を中国資本が握ると、・・・。」と言い出す。つまりは、自民党の熱烈な支持者となっている。私のまとめた「家族の復権 多様な形態の家族」の冊子を持って行くと、大店舗法を批判しだした。ヨーロッパはこれを許していないと、・・・。要は、昔の家族形態への郷愁を語りだしたのだ。しかし、これは、大きな問題がある。この旧来の家族の毒についての認識がないのだ。復古主義なのだ。家業としての産業に従事している人たちは、この従妹のように、なりがちである。「私たちは頑張っているのに、あいつらは!」。そして、労働者に対して、労働運動に対して激しい嫌悪感を抱く。そう、これは、私の父親が持っていた社会観そのものである。

家業としての〇〇が崩壊しているとして嘆いてもどうにもならない。国家行政は農業の法人化を推奨しているが、そのようなことなどで、今の農業・農村の問題が解決するものではない。立地条件の良い地では、うまくいくかもしれないが……。都会に近いと、ある野菜に特化して栽培すると、それなりの収入がえられるであろう。でも、全国の多くの地の田舎で、これが成功するとはとても思えない。またこれでは、農業というより商品作物づくりであり、定常化社会の農業とは言い難い。ビニールハウスでトマトやイチゴ等を年中栽培して現金収入を得ても、日々食べるその他の野菜や穀物をスーパーで買っているのは、……。これが悪いと言っているのではない。農業は市場経済と定常化社会を維持していくという両面をもつていのが良いのであるが、いくつかの作物に特化してしまえば、大きな問題があることになる。さらに、法人化しても、大きな機械を買い入れても、田舎では、肝心のその法人で農業労働をする人がどんどん減っている。1000万円を越える農業機械は、使われないままである。

大規模で特定作物に特化した農業は、寒さや雪で二毛作のできない地の経営形態である。私の住んでいる地は、いろいろなものが栽培できる。だから、そんなに広い土地は管理できないのだ。また、一つの作物に特化して栽培すると、天候異変や虫と菌等で全滅になりかねない。玉ねぎの全滅が、一つの例であろう。あの年は、秋から冬にかけて雨天の日が多くて、白色疫病が香川県全体に広がってしまった。どのような薬を散布しても効果がなかった。また、私の近くでイチゴのハウス栽培をしていた農家があったが、ハウス内で病気が広がりだすと、もう手が付けられなくなった。全滅だ。それで、とうとうイチゴ栽培を止めてしまった。ビニールハウスの残骸だけが残った。こうして、いっきに生活苦につながってしまう。こうならないために、繰り返し農薬の散布をすることになる。秋胡瓜等は、三日に一度農薬を散布している。鶏卵を生業としている処では、餌の中に薬を混ぜている。それでも、鳥インフルエンザは発生する。こうなると、この鶏舎の鶏は全部処分しなくてはならない。だから、農家は多品種を栽培しなくてはならないのだ。この事が、国家官僚たちは分かっていない。いや、分かろうとなどしていないのだ。今のアメリカに従属した社会システムでは、農業をつぶすことを目的としている、と言えよう。

この地で唯一考えられるのは、「集落営農」であろう。しかし、これも、難しい。農家は、個々人の意識で動いているのであって、協力なんて言うことは、なかなか……。農業は自分が田畑を管理しているから、そして栽培しているから、労働力の計算などせずに働くのだ。そこから上がる収益を自分のものとしてできるから、頑張っているのだ。そのために、他の人との協調が難しい実態がある。農業法人の一員として、労働者の意識でできうるものではない。あの暑い日差しの中で汗を流して働くには、この農民の所有欲があるからできるのであって、給料としては働けるものではない。農業は、自ら計画し、自ら労働するからこそ、できうる産業なのだ。

* 集落営農には、自営農として参加するための、いろいろなタイプがある。

このことについて、筍掘りということで、説明したい。京都の長岡京市に「竹の学校」というNPO法人がある。数人でこの組織を立ち上げている。彼らは放置されている竹林の整備をし、春になると筍を掘り出荷もしている。会員や協力者には筍を安く提供している。さて、彼等がさらに協力者を増やそうとして、市から財政的支援を受けて竹

林で神楽を開催した。竹林に舞台を作った。当日神楽を見に来た人は多くいた。しかし、会員と協力者は、ちっとも増えなかった。これからわかることは、現代の多くの人たちは、しんどい労働をしたくないということなのだ。重労働をするより、高価な筍であっても買えばよいとの意識が強いのだ。見田氏の言っているように、多くの人たちは、消費文化というぬるま湯から出たくないのだ。筍を掘り取るという労働は、しんどいのだ。冬に竹林から不要な竹を伐採して取り出すことも、大変な作業なのだ。寒風が吹いていても、額からは汗が噴き出る作業である。趣味や生きがいでないものではない。

「農業というのは拡大再生産をしませんから、来年収量を何倍にするということができないわけです。」「どんどん果実を生み出し続けるような成長産業にはなりえないものです。」

これは、医療・教育・介護でもいえることであろう。現在老人が増えているから、…。「介護は市場性があるように見えるけど、根本的なところでいうと、介護自体はいくらやったってそんなに利益幅が大きくなっていくものではありません。レバレッジで大きくなるものではないのです。」「人間の老病生死というのはまさに自然に直結したところにあって、自然の摂理に従っている。」

商売は仕入れて加工・生産して、売れて初めて儲けが出る。売れないことには、労働者を働かせても剰余価値は発生しない。

「その仕入れの部分が自然からの贈与である場合、定常的なやり取りから離陸することはできないのです。」

「戦後の経済発展で日本は定常的な経済から離陸したわけですが、それが限界を迎えてまた定常化を迎えた時に、もう一度農業というものを見出すという発想が出て来るのは自然なことだと思います。」

これらのことは、その通りであろう。

④AI(人工知能)とBI(ベーシックインカム)

今後起こりうることは、小さくなっていくパイ(分けあうべき収益や経費などの総額)を奪い合うことになり、貧富の格差と富の集中が激しくなることである。働く意欲や能力を有していても、労働市場で仕事に就けずに所得を得られず、そのために中間層が激しく分解していくであろう。その時、この崩壊を防ぐためには、どのようにして日常生活に必要な所得を確保したらよいのだろうか。一つは最低所得保障(BI:ベーシック・インカム)の導入が考えられる。AIが生み出す経済価値をBIとして全ての国民に再配分し、経済成長に重要な分厚い中間層の個人消費の底上げを図るのだ。つまりは、相互扶助的なシステムを社会全体に導入するしかない。相互扶助的な社会は、成長より持続が課題になる。根絶やしにしないということが、最も大切なこととなる。

AIの普及により、人間は「仕事を奪われる」のか、「仕事から解放される」のか、どうなるのだろうか。AI(人工知能)による仕事の代替とBI(ベーシック・インカム)による所得保障は従来の労働観を根底から揺さぶり、「人間は何によって生きているか?」という根源的な問いを投げかけることになるかもしれない。このことに答えられる情報の発信

がなされなくてはならない。見田氏のいう「③歓びとしての情報」を!

*「AI」と「BI」については、別紙の井上智洋(駒澤大学)「AI時代にこそベーシックインカムの実現を」参照

*「人間は何によって生きているか?」はトルストイの民話の題名である。このことについては、縮小社会研究会のHP掲載の機関紙第一号に掲載されている青野の「贈与＝交換関係の社会展望としての意味について」を参照

* イギリスは第二次世界大戦後に、「ゆりかごから墓場まで」という社会福祉政策をしてきた。これは、かつての繁栄した大英帝国が貧しくなったということ、また世界中の植民地から多くの人たちが帰国したこと、さらに、イギリスの植民地支配に協力していた現地の人たち(イギリス人の支配者たちに服従してその他の多くの人から収奪をして良い生活をしてきた人たちがたくさん移民として入ってきたことによる急激な生活苦と治安の悪化に対する政策である。

⑤贈与モデルと収奪モデル

「自然の贈与というのは丁寧に大事に使うもので、どんどん収奪していけばいいというものではないと知るわけです。」「それがこれまで、贈与モデルから収奪モデルに変えられてきた。」

すべてを商品化していこうとすると、どうなるのか?そのモデルはアメリカ社会にある。富の極端な偏在となっている。アメリカでは社会保障制度が整っていないから、不況時には大多数の貧困の程度はひどいことになる。あの昔のアメリカの大繁栄の時期でも、国民の30%は銀行に預金がなかったのだから、・・・。「市場での貨幣による商品交換関係」ばかりが社会内でなされていると、こうなってしまうのだ。この交換関係によって「自由」は形式的には保障されたが、王や封建領主による「収奪・再分配」はなくなったが、身分による差別はなくなったが、資本主義経済によって資産家となった家族は昔の貴族のようになってしまった。貨幣を持っていれば、何でも手に入り、好きなことができることになっている。

* 先に記述したイギリスと比べてアメリカには社会保障制度が整っていないため、例えばベトナム戦争でのサイゴン陥落時の移民(アメリカと手を結んでいたサイゴン政府関係者・協力者たち)はアメリカ社会で生活苦に陥り、ギャング化してしまい社会の治安が悪化した。

★さて、ここで平川氏が未来展望として贈与経済の意義について述べていることの意義は理解できる。しかし、平川氏のここに書かれている「贈与」理解は、少しおかしい。マルセル・モースの「贈与論」の理解としては、正しくない。贈与し合うのは、物質的な事だけではない。物・人・事(情報)、そして心の受け渡しの交換関係であることの意味がない。また、贈与というものの人間にとっての意味について述べられていない、物質的な意味だけではないのだ。このことについてモースはしつこく書いているのだが、・・・。贈与交換関係の呪術性が、物には魂が宿っていることを!!

人は唯一、自分の存在を何かから与えられたものとして感じてしまう動物であろう。それが親であれ、自然であれ、神であっても、生を与えられた者への負い目を抱いてしまうのだ。この世に生まれてきたことへの、何らかの負い目を感じている。この負い目を返さなくてはならないという感情は、人間の実存そのものに由来しているのであって、それに対して「贈与」のみが、つまり負い目への返礼としての贈与によって厄介な義務的な気持ちを払しょくできる。つまりは、贈与と返礼の関係性は、生を肯定でき

うる唯一のものとなっている。どのような人も、その量と回数の多い少ないがあっても、贈与と返礼の関係性をしている。この互酬交換関係は、「市場における貨幣による商品交換関係」がいくら盛んになっても消え去ってはいない。このような不断の互酬交換関係を通して「必要」の世界に閉じ込められていない「生きることの喜び」を生み出していることを、忘れてはならない。「市場での貨幣による商品交換関係」によるその場限りのパサパサと乾いた関係性を謳歌できるのは、経済が右肩上がりの時だけであるから・・・。

人間が生きる意味・目的・目標はいろいろあるが、あるたった一つの理由に行き着くと言えよう。それは、人やさまざまな組織(協同体)と結びついた人的関係性を感じつつ生きて行くことであろう。他の人たちとの結びつき、絆を形成することであろう。愛情であったり、友情であったり、あるいは貢献・奉仕であったり、金銭・物品・名誉等、それらをやり取りすることでより良い関係性を築くことであろう。このような相互承認される関係性の世界は、贈与と返礼の互酬交換関係がそれなりの働きをして成り立つものである。ここに、見田氏の言う「③喜びとしての情報」の拡大深化が意味あるものとなる領域がある。非物質的な様相を変えていくこと、これを私たちがしなくてはならないことであろう。

*しかし、贈与と返礼の互酬交換関係の毒を緩和するための市場経済も大切にしなければならない。そしてもっと言えば、資本の蓄積とならない市場経済にしなければならない。

*平川氏は、「収奪・再分配」という交換関係と贈与による「互酬関係」という交換関係の区別ができていない。この二つの関係性についても、先に提示した「贈与＝交換関係の社会展望としての意味について」を参照。

日本政府はアメリカのように、栽培作物を特化した株式会社化(例、モンサント等)を推奨している。また、テレビで株式会社化の成功事例を放映しているが、ここに、大きな問題がある。しかし、これは無理である。自然条件・社会条件が違うのだ。失敗事例は、放送しないのだから。

また、日本社会でこのような株式会社化に抗して、従来の「循環型で定常型」の農業を求めて農村帰農を多くの人たちがするであろうか。テレビでは「人生の楽園、素適な田舎暮らし」を推奨しているが、・・・、それはないであろう。今の日本の社会制度には、このことをしていけるような制度が設計されていない。例えば、教育・医療・介護等が無料でできるようなことにはなっていない。そのため、数年で田舎暮らしを止めて都会に帰っている人が多い。

農村帰農の現実的問題を、もう一つ指摘したい。農業は、一人では効率的な仕事ができない、ということだ。夫婦二人ならば、 $1+1=3$ にも 4 にもなる。一人では、 1.5 はともできない。1 さえ難しいことが多い。そして、二人となるには、結婚相手を見つけなくてはならない。このことがより難しい。農業をともしてくれる女を見つけることが大変なのだ。日々農作業だけをしては、付き合う機会がないことになる。女性と巡り合いそれが個人的付き合いへと発展するには、日々の農業労働以外のことにも興味関心を抱き、いろんなタイプの人たちとも積極的に付き合える知的文化的教養が必要となる。こうなると、現時点では、それなりの思想性が無い人では、農村帰農は難しいであろう。

また、家庭菜園ならともかく、農業は、生きがいや趣味で、できうるものではない。

あの有名な「半農半 X」提唱者であった塩見氏は、もう農業を止めている。だから、家業としての農業の復活も、それなりに意味あることなのだ。しかし、この崩壊を食い止めることはもうできない。だから、都会からの新規の農業就労者を大切にす政策が必要となる。そのためには、農家への所得補償政策をしなくてはならない。ヨーロッパの諸国は、これをして農業を保護している。それなのに、アメリカ追従の日本政府は、しようとはしない。つまりは、彼等は大企業の利益を守るが、農業はつぶしてしまおうとしているのだ。それなのに、農民は所有欲のため、あいもかわらず自民党を支持している。もう農業を止めてしまおうとしているのに、…。耕作放棄地がどんどん増えているのに、…。そして、自分の利益だけに、露骨に固執していくことになる。近所や親戚など、もう頼りにならない。

平川氏の言う「社会形態は、モラルに先行する」ことは、その通りであろう。まず、既存のモラルが激しく揺れないと、次のシステムへとは進まない。例えば、家族形態も、もっともっと変容していかないと、…。そして、私たちは、他の人たちの賛同がなくても、今なすべきことをしなくてはならない。モラルの浸透など待っていることはない。

しかし社会理論としては、贈与交換関係を人々がすぐさま大切にするようになるには言い難いことを踏まえなくてはならない。人々の意識が変わっていくには、そうすることで未来が今より幸せであるという意識を分け持つことが無くてはならないのだから、人々が贈与と返礼による交換関係に意味を見出すようになるには時間がかかることになる。そうなるまでに、意識ある人は、どしどし試行してみることであろう。

また繰り返すが、そのためには、物質的な損得勘定が今より緩和されるような社会にしなくてはならない。〈生きることの歓び〉を体感できるような社会に向けて、私たちはデザインし直さなくてはならないことは間違いないことである。その一つが、相互扶助の社会システム、社会保障の充実である。生きて行くことに物質的損得勘定にとらわれることが少なくなっていくことが必要であろう。つまりは、政治体制の刷新が必要となる。

今よりもっと物質的に貧しく明日の暮らしにも困るようになると、…。贈与交換関係を良いものと意識しだすことになるであろうが、でも、こうなっていくと、人々はファシズムという私たちがもう歴史的に経験している独裁的専制社会になってしまいがちであることを忘れてはならない。だから、私たちは、今、苦闘しなくてはならない。

* 贈与交換関係主導の社会にも大きな問題がある。このことについても、先に提示した「贈与＝交換関係の社会展望としての意味について」を参照。

⑥新しい共同体、田舎の毒に染まらないために!

ここで平川氏は、次のように述べている。「家族に変わりうる新しい共同体を作っていくことだと、私は思います。」

これについては、私も同感できる。平川氏は過渡的対応として、都会生活者として、「隣町珈琲」や「子ども食堂」をしているらしい。農業では、地域単位の「集落営農」を始めているところもある。これは、方向性としては、正しいであろう。しかし、これが、なかなか、…。でも、このようなことについて、保守的な人たちは激しい拒否反応をして

きている。もう無視できないほどになってきつつある。このことへの対策をしないと、政治は変わらないであろう。そのためにも、都会では、「隣町珈琲」や「子ども食堂」の取り組みは、意味あることだと思われる。私たちも、田舎で何ものかをしなくてはならない。私たちは、自由な社会を実現するために、その条件と課題をもっと明確化しなくてはならない。この作業の一つとして、鹿児島県大隅半島で取り組まれている「やねだん」のこれまでの取り組みから学びたいと思う。このことについては、別の文章にしたい。行政に頼らなくてもどうにか暮らしていける相互扶助機能を回復させるために、地域の独自財源を作り出している。ここに、注目したい。

★平川氏は、もう一つ変なことを述べている。農業に特別のスキルはいらないと言っているが、これは大きな間違いである。基本的認識の間違いがある。農業では、特別なそれなりの技術・工夫が必要なのだ。それも、その土地ごとに、田ごとに微妙に異なる技術の受け継ぎが必要なのだ。一人一人に微細技術の集大成がなくてはなしえないものなのだ。いくつかの失敗を通して学んでいくものなのだ。農業を始めてすぐに、それなりの成果を、収穫を得られるものではない。作物の成長過程という時間のかかる作業なのだ。種まきから実をつけるまでうまくいっても、最後の瞬間に台風が来たり、猪に入られると、…。そのたびに、微細技術が必要となる。平川氏は、このことを理解していない。この技術は家族内とか親しい人間関係内で引き継がれるので、家業としての農業という側面がどうしても必要となるのだが、…。この技術は、なかなか多くの人たちに公表されない。それを公表することを、嫌がる農家の人たちが多い。農家にとって、隣や同じものを栽培している人は競争相手なのだ。まあ、中小企業でいうと「特許」なのだ。田舎でこのような技術をおおらかに公開する人は、「バカ者」扱いされている現実がある。ここにも、田舎の毒がある。この田舎の「バカ者」たちが、都会からの帰農者に心を開くのだ。家業として農業の毒が蔓延しないためには、その集落内に何人かの都会からの帰農者たちが居住していると、薄められることになるのだが。

田舎の農村移住を希望するのであれば、周囲の人たちとは付き合わない覚悟で来ることだ。完全に無視して頑張って働き、それなりの暮らしが成り立つと、周りの人たちは評価をし始める。無理して付き合わないこと。後ろ姿で評価され始めると、関係性も変わって来る。ただし、自治会に参加しなくても、水利の諸活動には参加しないと、作りができないことになる。

大事なことは、このような移住者たちに心を開く人を探し出し、この人たちとの付き合いを大切にすることであろう。このように移住者に心を開く人たちは、田舎では、「バカ者」として評価されている。このバカ者が少なからずいる。このことで、どうにか過ごすことが、数年続くであろうが、ここまで頑張れば、後は、どうにかなる。これらの人たちを大切にすることだろう。この人間関係で、作物の栽培の仕方について学べることになる。

〈農村の共同体の問題〉

さて新しい共同体を求める議論は昔からあった。しかし、この問題のそばには、大きなクレバスが口を開いている。安易に共同体なるものに期待を抱くことには、警戒したい。見田氏の文章のまとめの中に書いたことを、再度掲載したい。

「頭のなかだけで作られる別の理想的なシステムへの幻想に酔わない人こそが、現代社会の矛盾と欠陥に正面から取り組める。本当に自由な社会を実現するためには、その条件と課題を明確化しなくてはならない。」

その現実・問題について少し述べる。田舎の毒に染まっている人たちは、実は旧来の近所の人たちにも心を開かない。地域外の世界との関係を積極的に持とうとはしない。労働者として働きに行っている会社と自分の管理している田畑と家庭内のことにしか興味関心を示さない。その他の事には、振り向かない。絵画や陶芸等の趣味にも、音楽にも、その他の文化活動にも関心を示さない。これらのクラブ等のいくつかの会合(アソシエーション*)と関わりを持とうとはしない。コンサートにも行かない。居住地から離れて多様な人の集まる場所・機会に参加してたくさんのおしゃべりをする、いろんな情報が得られるのだが、……。今何を栽培しているのか、その栽培の仕方、技術を相互交流できることになるのだが、それなのに、私の周囲の居住地の人たちは、それをしない。本を読まないのは仕方ないが、それならいろんな講演会に参加して耳学問を身に着ければよいのだが、それもしない。市の社会教育の催しにも参加しない。情報はテレビと近所のおしゃべりである。そのおしゃべりも、どこかの家の悪口であったり、自分の家族(子供や孫や家柄)の自慢であったり、比較ばかりして足のひっぱり合いに終始している。まさしく、隣の不幸は蜜の味そのものとなっている。そして、隣の家に対して、嫌がらせをする。未来が今より幸せであるという意識を持ってないために、より一層!

*シモーヌ・ヴェユの最後の著作である『根をもつこと』の前半に、「農民の根こぎ」の問題について述べている。

この本の後半は「フランスという国民国家の成り立ち・意味」について書いてあるが、前半は私たちにとって役立つことが書かれている。彼女は実際に農業体験をして、田舎の人たちは関わりを持って、農民には異文化体験が必要であることを述べている。そして、その方策も書いている。

地区内に多様な活動をしている人たちが多い処ほど、地域が活性化しているのだが、災害時にも助け合い活動が機能することになるのだが、残念ながら、私の周囲には、これがない。そのために、この前の七月の大雨の時、土砂が崩れてきても、関係した家の人だけが苦勞した。目の前に土砂が流れてきているのに、それを見に来た公民館長は傘をさして見ているだけであった。スコップ一つぐらい持ってきて働いてもらいたいものだ。その家の中に土砂が流れ込んでも、それは他人の家の事、どうでもよいのだ。「素敵な田舎暮らし」なんて、どこにあるのであろうか。確かに自然は残っている。しかし、人と人との共同性・助け合いなんてない。そのくせ、旧来の慣習については縛りつけようとする。そして、自分と異なる価値観の人に対して、嫌がらせを仕掛けて来る。このような彼らを動かすには、釣り針の先に千円札をひっかけておくことである。こうすると、すぐ寄って来る。私の近くの親戚を講演会等に誘うと、「あなたは、私とは別の世界に生きている。生きている世界が違う。」と言う。耳学問の大切さを話しても、……。このような共同体は、突き崩さなくてはならない。資本の文明化作用で急速に崩れているのだが、……。

平川氏の言う「新しい共同体」とはどのようなものなのか。都会の無縁社会からの脱出が、私の周囲の今まで述べたような共同体であってはならないであろう。平川氏の言うその内容が、方向性が書かれていない。このような基本的思い、その方向性

は、理解できるが、…。全体的感想として、平川氏の文章は、実態をあまり知らないインテリの語りである。これに対して、私たちは、この学習会を通して、具体行動を起こさなくてはならない!!たくさんのおしゃべりから多様な試行をしなくてはならない!!

* 近代社会におけるアソシエーションの役割意味については、『近代都市とアソシエーション』古関隆 山川出版 世界史リブレット 119 を参照。「厄介なしがらみからは自由でありたい。しかし、人との結びつき＝共同性なしで生きるのはやはり難しい。19 世紀末のイギリス、都市に暮らす労働者たちは、生きるために不可欠な共同性を何よりもアソシエーションに求めた。多種多様なアソシエーションで遊び、学び、助け合い、時には闘うことを通じて、匿名的にして流動的な都市の中で彼らの居場所が見出されていった。」

* 家族を演じることをしても、個を埋没させてはいけない。一人ひとりの個人を取り戻す、自分の生き方を見つけるための苦闘を妨げるような家族ではいけない。さりとして、家族内の他の個人への配慮を失うような生き方は、貧しい人生であろう。家族の問題については、下重暁子『家族という病』幻冬舎新書を参照。

* 知的文化的教養について、見田宗介氏は「売り家と唐様に書く三代目」という句で、「③歎びとしての情報」の在り方の一つとして提示している。金儲けに熱中して財産を築いた初代、そしてその苦労を見て育った二代目はそれなりに働く。しかし三代目は、小さい時から裕福な生活をして資産を使って教養を身につけた。しかし、消費生活しか知らないために、親から引き継いだ財産を使い果たして住んでいる家まで手放さなくてはならないこととなる。世間の人たちは、このような三代目を批判するが、この三代目の人生はそれなりの意味があるのだ。ここに、ある意味を見出している。

だから、平川氏は未来社会を展望して、贈与＝交換関係主導の社会へと転換しなくてはならないという願望を述べている。繰り返すが、贈与＝交換関係には、毒もあることを認識しなくてはならない。それも強烈な毒がある。一度壊れてしまう寸前まで行かないと、再建は難しいようだ。

「やねだん」の指導者の苦労は、すさまじい。反対者たちは、寄ってたかってつぶしにかかってきた経緯がある。一つ一つの出来事で、それまでの反対者たちを賛同者へと変えていった。さて、私たちは、何ができうるのか。

補説 私たちの世界は、物質的に「存在していないもの」によって構成されている

まずは、私たちの眼前にいない、つまり私にとって存在していないと同じような人たちとの関係性について考えていきたい。過去の人たちと、まだ生まれていない未来の人たち、そして同時代に生きていながら話したことも見たこともない遠方の人たちとの関係は、どのようなモノなのであろうか。このような他者との関係について考えてみよう。これは、その人の社会意識の在り方と、大きく関係することであろう。

死者は、もうこの世にはいない人である。しかし、その死者と直接的な関係のあった人たちにとっては、心の中に生きている。人は二度死ぬのだ。一度目は肉体の死として、そして二度目は、もう眼前にいない死者が元気で生きていた時に関わっていた人たちが死んでしまった時である。こうなると、それまで事あるごとに心の中でしていた対話にも登場することがなくなる。その死者のことを思い浮かべて対話する人がいなくなったのだから、もう完全にその痕跡がなくなることとなる。

死者は、生きている者にとって、直接的関係のあった者にとって、生々しく登場してくるのだ。死者は生きている人より、より強烈な関係性で現れてくる。何か仕事をしている時、あるいは一人でぼつんとしている時、私たちは絶えず死者に呼びかけ、呼びかけられている。心の中で処理しか

ねている事柄について思考している時、死者に問いかけている。実際には返答されることのない死者の返事に耳を澄ませようとしている。あの人は、今の私をどのように見ているであろうか。どのように評価するのであろうかと。このようなことをいつも考慮に入れて日々の生活上での選択を下しているのが人間の現実の姿であろう。深く意識していなくても、この死者の顔と声が現れてくる。死者はそこに存在していないのに、その非存在ゆえに、生きている人たちの判断や行動の規範となっている。死者に問いかけ、死者からのメッセージを聴き取ろうとしているのが、私たちなのだ。

また、肉親が目の前でなくなっていくのを見た場合、何とも言えない気持ちになる。人間が死んでいく時というものは、傍からはおよそ計り知れないことが起きていることを実感する。人が死んでいく時、今の私たちとは異なった別の世界を見ているのかもしれない。死んでいこうとする人間には、別の世界が向こうから到来しているように惹き込まれている感覚があるのかもしれない。このようなことを、どうしても思い浮かべてしまう。これは幻想かもしれないが、自然科学が 100 回あの世を否定しても、その否定には大きな説得力はない。

車に乗っていて CD から流れている歌を聞いていたとしよう。そして、何か理由でそれを止めて運転していたとしよう。機械を停止したのに、それなのに、心の中では運転者の心には、今まで聞いていたフレーズが繰り返し流れてくるのだ。もう聞こえなくなってしまった音が、リズムや詞が聞こえてくる。これが、私たちの頭脳なのだ。このように、人間の感知装置と思考は、過去と未来へと触手を伸ばす。あるその一時期だけの音楽を聴いてはいないのだ。過去に聞いていた音楽と、それに関係するエピソードを重ね合わせて、CD から流れている音楽を聴いている。そこでは、また、一度も聞いてことのない未来の音楽が先取りされていたり、このことに関係する出来事を想像したりする。このことから分かるように、私たちの頭脳は、他者からのシグナルを感じてしまうのだ。

つまり、私たちは、いつでも、「眼前」には存在していないものと関係して生きている。言葉も、そうであろう。ある時点の単独の言葉なんて言うものは、存在しない。その人が言い終わった言葉を聞き、その音声が、言葉が耳の奥に残っていて、次の言葉をそれなりに予測しているのだ。もうこの世にない空気振動と未来の振動の両方に感性・知性を広げているのが、普段の当たり前の会話であろう。つまり、まだしゃべっていない言葉も聞こうとするのが、対話するということであろう。

現代科学技術で測定できないものを「存在」していないとする者は、心の動いていない人たちであろう。何かすぐそこに、見えないけれども「何かがあるような気がする」という直感を手掛かりとして、かすかな「ざわめき」を聴き取ろうとする人たちこそが、真に思考している人たちであろう。眼前にないもの、存在していないものに対して心のセンサーを最高度にまで高めてつかみ取ろうとすることは、変な事ではない。このことは、例外的なことではない。だから、次のようにも言い得るであろう。私たちの世界は、物質的に「存在していないもの」によって構成されているのだと。唯物史観なるものは、歴史を解き明かすものではなくして、一つのイデオロギーなのだ。しかし、霊が存在するとまで言い出すと、それは毒となる。

また、人と会話している時、その他の何かをしている時、その行為している自分を見つめているもう一人の自分とも、私たちは関わっている。直接の自分ではない、少し離れて自分を冷静に観察している分身とも、関わっているのだ。思考するとは、自分が語っているその言葉をもう一人の自分が聞いていることに気づき、その人(もう一人の自分)との対話をするのである。だから、このような物的に「存在しないもの」との関わりなくしては、私たちは生きていけないし、思考もできないのだ。

このことは、もう存在していない過去の人・物・事を各自の内にもち、そして、まだこの世に生れ出していないのを先取りすることでもある。この二つのことを同時にすることなくしては、日々のなんでもない会話さえできない。つまり、大きく言えば、このような眼前にいない「存在しないもの」との関わりなくして、私たちは人間であることさえできないこととなる。

自分としては自由気ままに考えて活動しているように思えても、この身を取り囲んでいる「存在しないもの(他者)からのシグナルを聴き取る」ことをしているのだ。だから、私たちは、この私を包んでいる大きな全地球的な文明史的、そして特殊日本的な、そしてきわめて閉鎖的な限られた時代性と社会性の関係性の網の中にいることを、深く自覚しなくてはならない。この関係の網は、限りなく広く、そして頑丈である。時として、呪縛となり、人を苦しめる。恐ろしくもあるこの関係性の中にいることに気付かなくてはならない。この関係性で元気になる者もいれば、毒の網に絡み取られてそこから抜け出せずに苦闘する者も出て来る。だから、このような人間存在の在り方の中で、頭一つ抜け出して思考するには、物事を相対的に、そして総合的に思考するには、自分の実存をねじりこむことをしないと、ことは始まらないであろう。よく分からないにも関わらず、聞こえてくるかすかなシグナルに反応して、はっきりとはしないが自分の心や身体を惹きつけるものに対して、自分の身体を通して、自分の時間を使って、このシグナルに意欲をもって企投しないと、関係の網を緩めたり編み目を大きくしたり、そしてこの呪縛を断ち切らないと、恐ろしく縛り付けられた関係(呪縛)から抜け出すことはできないことになる。本を読んでも、強く願う者の前には、テキストは重い口を開いて語りかける。テキストの中にあっという間語られていないことが開示されてくるのは、読み手がそこに生身の身体を介在させた時だけであろう。私たち一人一人の生きる意味や、生き方を真剣に考えようとした時、生身の身体を通した未来社会の構想を築くことができることになるであろう。そしてそれは、独りの頭脳にひらめくのではなくして、多くの人との騒がしい論議のなかから形成されてくるものであろうことは、間違いないことである。

要は、私たち人間は言語を発達させて、多くの人たちとのコミュニケーションを可能にしてきたため、このような物質的には存在しないものとの対応をしているのだ。この言語は私たちが暮らしている諸々の対象を区別し差異化して、物質的世界とは異なる主観的な意味の体系としての「世界」を作り出し、この世を越え出た超越者をも想定している。また、このような言語活動を通して、我が内なるものを、自己を冷静に観察する自己意識、もう一つの自分も、作り出してきた。つまり、このような意識的世界に生きているのが、私たちなのだと思う。さらに言い換えると、宗教は、私たちが他の動物たちと比較して人間(ホモサピエンス)として生きかけてきたころから、私たちが作り上げてきた壮大な物語なのだ。だから、具体個別の宗教現象としてはいろいろであるが、宗教そのものは普遍的現象として世界のどこでも観察されているものであろう。